

主 題：私たちの兄弟ステパノ
聖書箇所：使徒の働き 6章8－15節

アフリカのナイジェリアでは過去4年間に6,000人以上、2019年1年間では1,000名以上のクリスチャンが殉教したという報告があります。この二千数百年間の歴史の中で、同じことが繰り返されています。多くの信仰者たちがその信仰ゆえにいのちを奪われている。クリスチャンの歴史というのは殉教の歴史だと言う人もいます。その最初の殉教者は私たちがきょう学ぼうとしているステパノという人物です。テキストとしてきょう我々が見るのは使徒の働き6章です。恐らく皆さんもクリスチャンの中で最初に殉教したのがステパノであったということをご存じだと思います。また同時に多くの皆さんがこのステパノが教会の霊的なリーダーのひとりであったこともご存じかと思います。

彼が霊的なリーダーとして選ばれていくその経緯が使徒6：1から記されています。「そのころ、弟子たちがふえるにつれて、ギリシャ語を使うユダヤ人たちが、ヘブル語を使うユダヤ人たちに対して苦情を申し立てた。彼らのうちのやもめたちが、毎日の配給でなおざりにされていたからである。」。エルサレムにはギリシャ語を使うユダヤ人たちとヘブライ語を使うユダヤ人たちがいました。ギリシャ語を使うユダヤ人はヘレニストと呼ばれました。つまりギリシャ化したユダヤ人のことです。彼らはエルサレムから離散していたところからエルサレムに戻ってきたユダヤ人たちです。ギリシャ語を話し、その当時エルサレムに住む多くのユダヤ人たちが話していたアラム語はほとんど理解することができなかった者たちです。また、ヘブル語を使うユダヤ人というのはこのパレスチナから離れることがなかったユダヤ人たちのことです。彼らは普段はアラム語を使い、ヘレニストたちが使ったギリシャ語はさほど理解することができなかったということが1節に記されています。

それぞれがユダヤ人としての礼拝を捧げていました。しかし、ギリシャ語を使うユダヤ人たちがヘブル語を使うユダヤ人たちに対して苦情を申し立てていくのです。それは彼らの中のやもめたちが毎日の配給に滞っていたからです。それが1節に出てきました。そこで十二使徒は毎日公平に配給が配られるようにと7名の者を選んだのです。使徒6：2－4「そこで、十二使徒は弟子たち全員を呼び集めてこう言った。『私たちが神のことばをあと回しにして、食卓のことに仕えるのはよくありません。そこで、兄弟たち。あなたがたの中から、御霊と知恵とに満ちた、評判の良い人たち七人を選びなさい。私たちはその人たちをこの仕事に当たらせることにします。そして、私たちは、もっぱら祈りとみことばの奉仕に励むことにします。』、この提案は全員の承認するところとなり、彼らは、信仰と聖霊とに満ちた人ステパノ、およびピリポ、プロコロ、ニカノル、テモン、パルメナ、アンテオケの改宗者ニコラオを選び、この人たちを使徒たちの前に立たせた。そこで使徒たちは祈って、手を彼らの上に置いた。」と書かれています。エルサレム教会のやもめたちの中に、毎日の配給がちゃんと届いていない人々がいるという問題が出てきたのです。そこで食事の役割をするためにこういう条件で霊的な者たちを選びなさいということで、彼らが選ばれたのです。このステパノの名前がリストの最初に挙がっています。それは恐らくこの人々の中でも大変霊的な人物、重要な人物であったからだとされます。

きょう皆さんにこのステパノという一人の若者を紹介したいのです。オズワルド・サンダースという70年近くクリスチャンリーダーとして働いた人物は、恐らくこのステパノというのは信仰歴においては4年ほどしかなかったのではないかと思います。イエス様を信じてまだ4年ほどしかたっていない人物です。信仰の長さから言えば大変短いです。しかし彼は主に大いに用いられた若者信仰者でした。だから長さがその人を成長させるわけではないのです。もちろん信仰の成長には時間が必要です。一日にして成長することはありません。ただこの人物を見る時に私たちが教えられるのは、信仰の成長というのはその人の生き方にかかっているということです。その人がどういうふう生きるかです。成人の日ということで、特に成人を迎える若い人たち、またそうでないすべての信仰者の皆さんにとって、このステパノという人物が大きなチャレンジをもたらすことを願います。

A. ステパノの特徴

ステパノという人物の特徴を今から我々は見ていきます。この6－7章の中に「満たされた」ということばが4回、6：3、5、8、7：55に出てきます。この「満たされた」というのは「支配されている」とか、「統御されている」という意味があります。今から私たちはこの愛する兄弟の信仰者としての七つの特徴を見ていきます。これがこのステパノという人物でした。繰り返しますが、願わくばこのステパノという信仰者の特徴を見ることによって、あなたの信仰が変えられることを期待します。

1. 「御霊に満ちた」 エペソ5：18

まず最初に、ステパノは御霊に満ちた人でした。3節に「あなたがたの中から、御霊と知恵とに満ちた」人を選べと出てきます。つまり聖霊なる神によって支配されていた人だということです。彼の考えも彼の思いもすべてあることだけを願って生きていたのです。それは主のみこころに従うことです。確かに多くの皆さんが主のみこころに従いたいと願って歩んでおられると思います。でも実際私たちの肉はみこころに従わないようにと働き続けます。ですからみこころに従うと言うことは簡単ですけれども、実践することは大変難しいことを我々は知っています。それでいて神様は私たちに継続して常に御霊に満たされ続けていきなさいと、エペソ5：18で命じています。ということは御霊に満たされて生きることがあなたや私にとって不可能ではないということです。神様は私たちにできないことを命じるのではない。できることを命じておられます。実際にステパノはそのように生きたのです。そして6：5に出てきた残りの6人の人たちも同じように御霊の人、御霊に支配された、聖霊に支配されながら生きた人たちだったのです。あのバプテスマのヨハネもそうでした。パウロとともに働いたあのバルナバという人物も「彼はりっぱな人物で、聖霊と信仰に満ちている人であった。」と使徒11：24に書いてあります。当然パウロもこの十二使徒たちも常に聖霊に支配されることを求めながら生きた者たちです。なぜそれが大切なのかというと、聖霊に満たされて生きる、その生き方こそが神の前に正しい生き方なのです。そのことを我々はしっかりと心に覚えなければいけない。

なぜなら何が正しいのか、何が私たちに必要なのかを知っているのは神です。その方のみこころに従う時にこそ、私たちは主が約束してくださった祝福を実際に経験することになるのです。まさにその祝福を経験していた人物について今私たちは見ているのです。先ほども見たように、神様の祝福というのは繁栄を約束しているものではありません。物がなくても、病の床にあらうと、自分の思いどおりに物事が進んでいなくても、その中であって喜びを持って、感謝を持って生きることができる。物質的にどんなに豊かになっても、我々はみんな心の豊かさを求めています。その心の満足や豊かさは神に従う以外に得る方法はありません。あなたや私が神様のみことばに従い、御霊に支配されて生きるならば、我々は決して聖霊を悲しませる歩みをなすことにならないのです。

皆さん、ぜひ自分に私は心から主のみこころに従いたいと願っているかどうかと問いかけてみてください。主のみこころに従うために私は自分の夢や将来の計画、そのすべてのものを捨て去ることができるかを考えることです。なぜなら主とみこころに従うのを妨げるのは、あなたや私の自分勝手な自分中心な考えや夢です。みこころに従う、その歩みを妨げる自分中心な思いや夢、計画というものをすべて捨て去る決意がなければどうやってみこころに従うことができます？繰り返します、主のみこころに従って生きることが主の祝福にあずかるすべであるということです。

ステパノという人物は主のみこころに従順な人であった。それが一つ目です。

2. 「知恵に満ちた人」だった 6：3、10、エペソ5：10、Iヨハネ3：22

二つ目は彼は知恵に満ちた人であったということです。先ほどお読みした3節に「知恵とに満ちた」と書かれていました。10節にも「彼が知恵と御霊によって語っていた」と書いてあります。3節に十二使徒が教会に起こった必要のために7人の人々を選ぶ条件が書かれていました。この中に知識のある人たちを選びなさいという条件は記されていませんでした。書いてあるのは知恵のある人たちを選べということです。知識のある人たち、つまり神のことについてたくさん知っている人、聖書のことについてたくさん知っている人はたくさんおられるでしょう。問題は知識ではなくて知恵なのです。知恵というのは我々が日々直面するさまざまな状況にあって、どのような選択が神の前に正しくて、どのような選択が神を喜ばせるのか、栄光を現すのか、それを正しく判断する霊的資質です。この知恵によって私たちは何が正しいのかを見極めていくことができるのです。だから知恵が要るのです。

覚えていますか？私たちはかつては闇の中にいた、つまり罪の中を歩み、永遠の滅びに向かっていたのです。でも「今は、主にあって、光となりました。光の子どもらしく歩みなさい。」とパウロがエペソ5：8で言っています。そして10節に「そのためには、主に喜ばれることが何であるかを見分けなさい。」と続くのです。「光の子どもらしく歩む」ためには「主に喜ばれることが何であるかを見分けなさい」と。神の前に何が喜ばれることなのか、それを見分けるのが「知恵」なのです。ヨハネはこんなことを言っています。「求めるものは何でも神からいただくことができます。」（Iヨハネ3：22）、これだけ聞くと何か非常にありがたいメッセージです。でもこの箇所はそんなことを教えているわけではありません。「なぜなら、私たちが神の命令を守り、神に喜ばれることを行なっているからです。」と続きます。なぜ私たちは神の前に願ったことが必ず神によってかなえられるのだという確信を持つか——それはこのみことばが言うように、神の命令を守り、神に喜ばれることを行っているからです。つまりこの人は自分の願い事を神の前に持って行って、神様、何とかこれをかなえてください、何とか私の欲しい物をくださいという願いをしているのではないのです。

確かに私たちのニーズ、こういう必要があるということを神の前に申し出ることには間違っているわけではありません。でもこの人は神様、こういう必要があります。でもあなたのみこころがなりますようにと願うのです。なぜなら私たちの必要のすべてをご存じなのは神です。そして何が今あなたに必要で、今何があなたに与えられなければならないのか、そのことをご存じなのも神です。その方にお任せするのです。ですからIヨハネ3：22で「求めるものは何でも神からいただくことができます。なぜなら、私たちが神の命令を守り、神に喜ばれることを行なっているからです。」、この人は自分の願いや自分の思いではなくて、神様、あなたのみこころがなりますようにと願い、そのように祈っていた。だからその祈りは必ず聞かれると言っているのです。みことばを見るならば、私たちが自分の欲しい物を神の前に求めたら、神様が何でも下さるという約束は記されていません。そんなふうには人々は取ろうとしましょう。なぜならそれは我々の肉が喜ぶメッセージだからです。でも我々が覚えなければいけないのは、私の欲しい物を得たからと言って、私たちは本当の満足を得ることはないのです。神のみこころがなされて初めて私たちは喜ぶのです。なぜならそれが最善だからです。そのことを私たちは学ばなければいけないのです。

では、このステパノが持っていた「知恵」というのは、どうしたら私たちが手にすることができるのかです。6：9「ところが、いわゆるリベルテンの会堂に属する人々で、クレネ人、アレキサンドリヤ人、キリキヤやアジャから来た人々などが立ち上がって、ステパノと議論した。」とあります。ここを読むと、リベルテンの会堂——これはユダヤ人の会堂ですが——、ここにいろいろな国の人々が集っていたように見えます。確かにこの箇所はそんなふうにも取れるのですが、原語をそのまま直訳するとこうなります。

「リベルテンと呼ばれる会堂、クレネ人の会堂、アレキサンドリア人の会堂、そしてキリキヤとアジャからの人たちの会堂、その中からある人々がステパノと議論するために立ち上がった」と。違いがわかりますか？この新改訳聖書だったら、リベルテンという一つの会堂にいろいろな人々が集まっていたように見えます。でも原語では、どうもリベルテンの会堂もあるし、それ以外の会堂も存在したと。この当時エルサレムにはたくさんのユダヤ人の会堂が存在していたと言われています。数は定かではありません。いずれにしろ、外国に住んでいてエルサレムに戻ってきたギリシャ語を話すユダヤ人たちがエルサレムにいろいろな会堂を造っていました。そしてその中のある人々がステパノと議論するために集まってきたとこの箇所は我々に教えています。彼らはステパノの話聞いて反論を覚えました。そこで彼と議論、討論する、言い争うことを目的に集まってきたのです。

ところが10節「しかし、彼が知恵と御霊によって語っていたので、それに対抗することができなかつた。」と。だれひとりとしてステパノと対等に話すことができなかつた。これ、圧巻でしょう？だれも対抗できなかつた、だれも打ち勝つことができなかつた、そういう意味を持ったことばです。なぜなら彼は「知恵と御霊によって語っていた」と。少なくともこのことが私たちに明らかにすることは、このステパノという人物は聖書の正しい知識をしっかりと身に着けていた人物だということです。ですから彼の語ったことは本当にみことばの真理に基づいたものです。時間の関係で7章を詳しく見ることはできませんが、イスラエルの歴史を語っています。アブラハムに始まってモーセやさまざまな信仰の勇者たちのことが出ています。ですから正しい知識を持っていたのです。でもそれだけでは何もならない。

二つ目に言えるのはステパノは御霊に満たされ続けていたのです。その彼を支配し、彼を導く聖霊なる神が彼のうちに蓄えられているみことばを思い起させながら、しかも確信を持って勇敢に語るようにと導いていくのです。それがまさにこのステパノのメッセージの中に記されています。彼は知恵にあふれ、何が神の前に正しいのかをしっかりと見分けることのできる霊的な人物だったのです。

3. 「信仰に満ちた人」だった 6：5

三つ目に信仰に満ちた人でした。5節に「信仰と聖霊とに満ちた人ステパノ」とあります。この信仰に満ちた人というのはどういう人かと言うと、どんな時にも主に信頼を置いて歩む信仰者のことです。つまり主が語られたことを疑うことなく、そのとおりに信じ切った人のことです。そういった信仰者が私たちの群れの中にもたくさんおられます。神がお喜びになるのは、神が語ったことは必ずそのとおりになると信じる人です。それは明らかに神様、私はあなたを信頼していますと告白することになります。何度も皆さんとお話ししていますが、私たちの信仰生活というのは神に信頼することを学ぶ生活だと思いませんか？神様はいろいろなことを私たちの日々の生活にもたらしてくださる。辛いこともあります、悲しいこともあります。希望を見失ってしまいそうになることもあります。でもそういうすべてのことが偶然に起こっているわけではありません。主がそれらをアレンジしておられる。主が愛と完全なみこころに基づいてすべてのことをなしておられるのです。問題はそれを信じるかどうかです。あなたは主の約束は必ず実現するのだと心から信じているかどうかです。もしそれを信じておられなかったらあなたの信仰生活は常にぐらつきます。あなたが願っていないことが起これば、あなたの信仰はぐらついてしまいます。神様、なぜ私の生活にこんなことばかり起こるのですか？なぜあの人のようでない

のですか？神の前に愚痴や不満、不平が常に出てくるような信仰生活を歩むことになる。神が喜ばれる信仰者というのは、神が言われたことは絶対そうなるのだという固い信仰を持っているのです。

ステパノは主の約束を疑うことをせず、死に至るまで信頼し続けた人だったのです。

4. 「恵みに満ちた人」だった 6：8、Iコリント15：10

四つ目に8節「ステパノは恵みと力とに満ち」ているとあります。今私たちが見てきたように、ステパノというのは神様のみこころに従っていこう、常に聖霊なる神様に支配していただいて、主に従った人物だと見てきました。それゆえに主は彼に恵みを与え続けたのです。もう少し時間があれば、ステパノのすべてのことを見ることができるのですが、彼は大変な困難に遭遇します。なぜなら彼はこの後殉教するのです。死を目の当たりにするのです。その中であっても、それを耐える恵みを彼はいただいているのです。死に直面した時でも、恐れることなく平安と期待を持って歩み続ける恵みをいただいているのです。自分の周りを見たら敵だらけです。ステパノに対して怒りを持っている連中が彼を取り巻いているのです。その中であっても希望を失うことなく、意気消沈することなく、勇敢に主のあかしをなし続ける恵みをいただいているのです。彼はすばらしい信仰者だったと我々は見てきました。でもそれは彼が持って生まれた性質だとか、彼に備わっていた力によって歩んだからではなかったのです。彼がこのように大変な状況でも平安を持って喜びを持って、信頼を持って歩み続けることができたのは、神がそうさせてくださったからなのです。それが恵みなのです。神様は私たちに、ではあなたの力で頑張りなさいよなんて言われない。我々にとって必要なのはすべての状況にあって、その状況に負けない力、それに勝利する力、その中で人間が理解することができない喜びを持って、平安を持って、主のすばらしさをあかしする力です。それは神が与えてくださるものです。

パウロはこう言いました。「ところが、神の恵みによって、私は今の私になりました。」、Iコリント15：10です。つまり神の恵みによって今の私は救われたという話です。「そして、私に対するこの神の恵みは、むだにはならず、私はほかのすべての使徒たちよりも多く働きました。」、彼が救いにあずかってから主のしもべとして主に仕えた話をします。「しかし、それは私ではなく、私にある神の恵み」だと。救いにあずかったパウロ、恵みによって救われたパウロはその神の恵みによって生きたのです。神に従っていこうとする、神のみこころを行っていこうとする、神の命令に従っていこうとする時、神はそんなあなたに必要な恵みを備えてくれるのです。

だから、ステパノは神の恵みによって生きた人だったのです。皆さん、希望を見失っていませんか？我々が経験したことのない困難の中にあつて、ステパノはひよっとしたらあなたや私がまだ経験したことのない平安を持って歩んだのです。みんなが石を持ち、そしてもう間もなく私はこの世で最後の息をする、そんな中であっても彼の心が平安に満たされていた。なぜそんな歩みができたのか——。私たちが知っているのは神の恵みが彼に与えられていたことです。ということはあなたも私もこんなふうはこの地上を旅することができるのです。

5. 「力に満ちた人」だった 6：8、使徒1：8、IIコリント12：9、コロサイ1：29

5番目に、彼は力に満ちた人であったと8節に出ています。「恵みと力とに満ち」ていたと。その後を見ていただくと、「人々の間で、すばらしい不思議なわざとするしを行なっていた。」と書いてあります。この行っていたという動詞は未完形です。継続してその行いを行っていた。だから一回行ったのではない。何度も何度も繰り返しそのようなことをしていたということです。

ステパノは彼に敵対して、彼を憎む者たちの前で大変勇敢に振る舞い、そして神の救いのメッセージを大胆に語り続けていました。この力は彼のうちに生まれながら備わっていたのではなくて、救いにあずかることによって神からいただいたものです。イエス様が昇天なさった時に、そこにいた弟子たちに対して天使たちが告げました。使徒1：8「聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。」とあります。彼は力を受けていたのです。そしてその力を彼は示したのです。ここにあるように、「人々の間で、すばらしい不思議なわざとするしを行なつた」、いろいろな奇跡を行ったと。まだ新約聖書が完成していない当時、彼らのメッセージの真実性を明らかにするために、こういった方法を神はお使いになった。でも私たちがしっかり覚えておきたいことは、神がこのステパノを通して神の御力を明らかになさったということは、神ご自身の偉大さ、すばらしさを現すためにあなたや私を神はお使いになるということです。

ただし、あなたや私が神様の御力を現す器として用いられるためには条件があるのです。それはそのことをあなたが望むかどうかです。ステパノはそのことを願って生きたのです。そして神は彼を喜んでお使いになった。いいです？神様は私たちを何のために救ってくださったのか——。あなたや私を通して神ご自身の栄光を現すためにです。あなたや私を通して神のすばらしさを世の人々に明らかにするためにです。ひよっとしたらあなたに欠けているのは、神様、どうかあなたの栄光のために私を使ってくださいと願うことかもしれない。そのことを本当に神の前に望んでいないとするならば、神はあなたを

お用いになることはできない。そのことを願ったステパノがどういうふうに進んだのかを我々は既に見てきました。そのような歩みをあなたがなす時に、神様は確実にあなたを使って神ご自身の栄光を現してください。今私たちがしているのは、神が栄光を現されたステパノの歩みを見ながら、その彼の歩みとあなたや私の歩みを比較することです。ステパノはこうして主の御力のあかし人として生きたのです。彼は自分の力を証明しようとしたのではない、彼は彼のうちにある神の力を明らかにしようとした。そして神はこのように彼を用いて神ご自身の御力を示したのです。

6. 「評判のよい人」だった 6 : 3 I テモテ 3 : 7

6番目、彼は評判のよい人でした。3節に「評判の良い人たち七人を選」べとありました。彼は人々の前でキリストをあかしする人でした。日々の生活がまさに光であり、塩であったと言えます。なぜそう言うかというと、彼は神様に喜ばれることを選んでそのことを実践していたからです。すべてのことを主のために行おうとしていた彼は間違いなくすべてにおいて勤勉であったし、すべてにおいて誠実であったと言えます。うそ偽りのない生活をしていたはずですよ。

なぜかということ、神の目を恐れて生きている人は神の前に正しくありたいと願っているゆえに、与えられたことを忠実に一生懸命やろうとするのではないですか。だれからも後ろ指を指されることがないように注意して生きたはずですよ。少なくともそのことから彼が聖霊に満たされて生きていたことがわかります。人ではなく神を恐れながら生きたのです。その結果、主のよきあかしが彼を通してなされていたのです。評判のよい人、だれひとり彼にこんな問題があると指摘することができなかった。教会のリーダーを選ぶ条件を覚えていますか？ I テモテ 3 : 7に「教会外の人々にも評判の良い人でなければいけません。」、つまり教会内はもちろん教会外の人にも評判のよい人でなければならないと。このステパノという人物は、その会堂の中においても外においても非難されるところのない人物でした。

7. 「愛の人」だった 55-60節

これまで私たちはこういったことに「満ちた」人、このことばを見てきました。そのことを通して我々はステパノがどんな人物だったのか、彼の特徴を見てきました。最後の七つ目は「満ちた」ということばはないのですが、彼のしたことを見るならば、確実にこの結論に到達します。それは彼は愛の人だったということです。この後彼は殉教していくのですが、その最期の時間を時系列に並べてみたいと思います。

1) 群衆がしたこと : 57-59節

最初に私たちが見たいのは、群衆がステパノにしたことです。6 : 11-14のところでは何があったかということ、人々はステパノと議論するために集まった。そして彼らはステパノの間違ったところを指摘しようとしたのです。ところが10節、ステパノが「知恵と御霊によって語っていた」から何ひとつできなかつた。そこで何をしたかということ、11節「彼らはある人々をそそのかし、『私たちは彼がモーセと神とをけがすことばを語るのを聞いた。』と言わせた。」とあります。そして12節「また、民衆と長老たちと律法学者たちを扇動し、彼を襲って捕え、議会にひっぱって行った。」、そして彼らを使ってステパノを告発するのです。その告発の詳細が今お読みした11-14節に記されています。何を告発したのかということと四つあります。

- (1) ステパノはモーセを汚している。
- (2) 神を汚している 11節
- (3) 聖なるところ(神殿)を汚している 13節
- (4) 律法に逆らっている

これが彼らが挙げた告発の理由です。

ステパノがこういった告発に対して応答しています。7 : 1-53です。そしてステパノがこのメッセージを語った後、57-58 a節「人々は大声で叫びながら、耳をおおい、いっせいにステパノに殺到した。そして彼を町の外に追い出して、石で打ち殺した。」、これが群衆がしたことでした。

2) ステパノがしたこと : 祈り 59-60節

① 応答 7 : 1-53

ところが、ステパノがしたことが7 : 1-53に記されています。非常に長いところなので時間の関係でお読みしませんが、ここでステパノが言いたかったことをまとめると、主の真実さとそれに対するイスラエルの不誠実さです。神様はご自分の民を救うために人を立てたのです。ところがイスラエルはその人に逆らうという話です。2-8節はアブラハムの話です。彼は主の導きを信じて忠実に従い続けたのです。そして9-16節にヨセフの話が出ています。主に忠実に従った彼に対して今度は彼の兄弟たちが悪を行います。売り飛ばすのです。ところがそれも神様のご計画のうちにあります。神はその人間の悪を使って神のわざをなすのです。エジプトの地においてヨセフは用いられるのです。そしてた

くさんのイスラエルがエジプトに住むのです。ところがエジプトの王は彼らを変苦しめた。そこで神は彼らの祈りを聞かれて、民を救うためにモーセを立てるのです。モーセの話が17-43節まで出てきます。人々はモーセによって解放されたのに、最終的にモーセに逆らいます。そのことを使徒7章の中でステパノは語ったのです。44-50節では、神はイスラエルの民に幕屋を作るようにと言いました。そして忠実に幕屋を造ったのです。ダビデは神の住まいのためにということで神殿を造ることを考えます。そしてソロモンがそれを完成させます。ところがイスラエルは何をしたかというと、神は神殿に住まれるのだと信じて、つまりこの場所が特別なのだとして誤った礼拝が生まれていったのです。彼らは結局神に逆らうということを選択するのです。ですから常に神は人々を憐れんで、彼らに救いの手を差し伸べた。でも結果的に人々はその神に逆らうという選択を繰り返してきたのです。

そして最後51-53節でステパノは、いつまでたっても心を頑なにしている彼らを責めるのです。51節「かたくなで、心と耳とに割礼を受けていない人たち。あなたがたは、先祖たちと同様に、いつも聖霊に逆らっているのです。」、ステパノと議論するために集まってきた連中に対してステパノは「あなたたちは頑なだ」とメッセージを語るのです。「あなたがたの先祖が迫害しなかった預言者がだれかあったでしょうか。彼らは、正しい方が来られることを前もって宣べた人々を殺したが、今はあなたがたが、この正しい方を裏切る者、殺す者となりました。」と。あなたたちは過去のあなたたちの先祖たちが神によって遣わされた預言者たちに逆らったように、いやそれ以上に神によって遣わされた約束の救世主に逆らっている。こうして歴史上の真実を明らかにするを通してステパノは、このステパノに対して議論しようとする心が頑なな者たちに対して、彼らの罪を明らかにするのです。道理で彼らが怒りを覚えるはずで、これがステパノが彼らの告発に対してしたことです。

② 主に霊を委ねた：「主イエスよ。私の霊をお受け下さい。」

その後、59節に「こうして彼らがステパノに石を投げつけていると、ステパノは主を呼んで、こう言った。『主イエスよ。私の霊をお受けください。』」とあります。いのちの源であるお方に彼の霊を委ねるのです。

③ 彼らのために祈った

・ 祈らなかったこと：

そして最後に「ステパノは主を呼ん」だと59節にありました。60節には「そして、ひざまずいて、大声でこう叫んだ。『主よ。この罪を彼らに負わせないでください。』」とステパノが祈ったのですが、祈らなかったことは何かというと、彼らの悪に対して神様どうか彼らに復讐して下さいますとか、彼らに何かさばきを下して下さいと祈っていません。

・ 祈ったこと：

「主よ。この罪を彼らに負わせないでください。」と彼はこの人々の赦しを求めたのです。イエス様が十字架の上で祈られた祈りを思い出しません？イエス様は十字架の上で十字架につけて喜んでいるこの兵士たちや宗教家たちに対して「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからない」（ルカ23：34）のだと。つまりなぜ私が十字架に架かっているのか、そのまことの意義を彼らが知るように祈ったのです。ステパノは自分に石を投げて自分を殺そうとしている人たちの罪を彼らに負わせないように、主よ、彼らを赦してやってほしいと祈っているのです。

なぜこんな祈りができたのでしょうか。人間だったら少しぐらい怒っても、少しぐらい愚痴を言っても……。でも彼はそれをしなかった。その答えは7章の中にあります。彼は神に遣わされた預言者たちに逆らったイスラエルの民ではなかったのです。神によって遣わされた者たちは神に従い続けたのです。ステパノも同じように神に従い続けるのです。私の人生はもう私のものではなくて、これを導いておられるのは、用いておられるのは神なのだ、神の主権を信じるのです。主のみこころがなされたらいい。もし生きることで栄光が現れるなら生きるし、死ぬことで栄光が現れるのなら死にますと。パウロもそう言っています。あなたや私のいのちを司っているのは神なのです。この方のみこころがなされるのが私たちの願いです。それが常に最善だからです。今我々が見てきたようにアブラハムは神は主権者であり、神のなされることは必ず常に最善であり、それは信頼に値するものだ、神は絶対に約束を破ったりしないのだと確信していました。ステパノも同じようにすべてのことを導かれる神にすべてをお委ねしたのです。主よ、今この瞬間が私の地上における最期の時間だったら、感謝します。なぜならそれがあなたのみこころだからです。

イエス様を信じた時から私たちはイエス様に似た者に変えられていくと教えます。イエス様は喜んで十字架に架かっていかれた。それが父のみこころだったからです。なぜこんな罪深い連中のために死ななければいけないのか、愚痴のひとつもこぼすことはなかった。父なる神のみこころに従った。ステパノは同じようにして歩んだのです。なぜですか？ではなかったのです。あなたのみこころのままにと。

彼はこんなふうに振る舞わなければいけないからと思って振る舞ったのではないのです。このように振る舞う人へと変えられていたのです。

B. ステパノが果たした役割 使徒 8 : 2

最後にステパノが果たした役割を見てみましょう。8 : 2を見ると、「敬虔な人たちはステパノを葬り、彼のために非常に悲しんだ。」とあります。しかし、この死は神のご計画だったのです。このことを通して神様はすばらしいみわざをなさるのです。

1. ある使徒の救い

ある使徒の救いが実現するのです。7 : 48を見てください。そこに「しかし、いと高き方は、手で造った家にはお住みになりません。」と書いてあります。使徒 17 : 24 「この世界とそこにあるすべてのものをお造りになった神は、天地の主ですから、手でこしらえた宮などにはお住みになりません。」と、非常に類似していませんか？このメッセージを語ったのはパウロです。そして、今お読みした使徒 7 : 58 を見てください。「そして彼を町の外に追い出して、石で打ち殺した。」、これは群衆がしたのです。「証人たちは」、つまりそれぞれこの人はこんなことをしました、こうして罪を犯しましたとまず証人が出てくるのです。そのことを証言して彼は石を投げるのです。そしてその「証人たちは」自分の着物を脱いで石打ちをするのですが、その時にその着物をだれの足元に置いたのかが書いてあります。「サウロという青年の足もと」、このサウロというのは救われる前のパウロです。パウロはこの一部始終を見ていたのです。今この瞬間に息絶えるというステパノが口にしたメッセージを彼は聞いているのです。使徒 22 : 20 でパウロ自身が「あなたの証人ステパノの血が流されたとき、私もその場において、それに賛成し、彼を殺した者たちの着物の番をしていた」と言っています。このパウロの救いに影響を及ぼしたのはステパノだったのです。このステパノという人物は周りの人々に影響を及ぼす人物であり、そんな人生を生きただけです。

2. 世界宣教の始まり 使徒 8 : 1、使徒 6 : 15、出エジプト 34 : 35

二つ目に何が起こったのかというと、世界宣教が始まるのです。8 : 1を見てください。「サウロは、ステパノを殺すことに賛成していた。その日、エルサレムの教会に対する激しい迫害が起こり、使徒たち以外の者はみな、ユダヤとサマリヤの諸地方に散らされた。」とあります。神様は決して間違いを犯される方ではないのです。このステパノを殺すという出来事があつた後、クリスチャンに対する迫害がエスカレートするのです。この当時の弟子たちはまだ世界宣教ということは全然わかっていなかった。神様の大命令は全世界へ出て行って福音を語りなさい、そんなことは彼らの中にはまだ確立されていなかった。そこで神はこの迫害を使うのです。迫害を使ってこの人々を世界じゅうに送っていくのです。そしてこの日本にも来たのです。すごいみわざを神はなさったのです。だから私たちの神は信頼に値するのです。我々の目にはどうしてもと思える出来事かもしれない。でも神の目にはそうではないのです。神はご自分の完全な計画をなさるのです。私たちの責任はそれを信じるかどうかなのです。

最後にきょうのテキスト 6 : 15 に戻って「議会で席に着いていた人々はみな、ステパノに目を注いだ。」とあります。つまり彼はこうやって告発され、彼がどんなふうに弁明するのだろうとみんなの目はステパノに注がれたのです。その時「すると彼の顔は御使いの顔のように見えた」とあります。ステパノの顔は神の栄光で輝いたと言っているのです。このようなことを経験したのは彼を入れてふたりしかいません。もうひとり旧約のモーセです。出エジプト 34 : 35 に「モーセの顔のはだは光を放った。」とあります。なぜこんなことが起こったのか——。つまりこのことによって、神ご自身がステパノを喜んでいたことを明らかにしたのです。ステパノのこれから語るメッセージもまさにこれは神がお喜びになるメッセージだと。そして、このメッセージを語り、群衆から石打ちに遭い、その人々の罪の赦しを祈ったステパノは最後に「こう言って、眠りについた。」とあります。7 : 60 です。「眠りについた」のです。彼は死んだのです。最後の息をして。でも「眠りについた」というのは、目覚める時があるからです。その次の瞬間、彼は神のもとで目を覚ますのです。間違いなくその時に主ご自身から「よくやった、よい忠実なしもべだ」と褒めていただいたはずです。人生をどんなふうに生きるかです。長さではありません。質の話です。

きょう私たちが見たこのステパノという人物は、人間的に見るならば確かに短い人生を送ったと言われるかもしれない。でも神の前に最高に価値ある人生を生きただけです。最後に、信仰者の皆さん、今からでもあなたはこんな人生を生きることができるのです。どうしたらいいか——。ステパノがどんなふうに生きたのか私たちは見てきました。きっとあなたは神によって責められているはず。あなたはここがまずい、ここはできていないと。もしあなたが神の前に悔い改めてステパノが歩んだように生きようとするならば、確実に神様はあなたを通して神のみわざをなしてくださる。神があなたを使わないと言っているのではないのです。あなたがノーサンキュー、結構ですと言っているのです。ですからもし神様があなたに語っておられるように、あなたが主に用いられたいと願うならば、それを求めるこ

とです。神様はあなたの弱さもすべてのことを知った上であなたを使ってください。きょう私たちが見たこのひとりの人物、すばらしい兄弟です。すばらしい信仰者です。神の栄光を現した人物です。こんなふう生きるかどうか、それはあなた自身が決めなければいけない。願わくばきょう新たな決心を持って残された人生をしっかりと神の栄光のために生きる、そんな歩みを始めていただきたいと願います。